

『白氏文集』編集に関する研究 公表要約

中国語学中国文学専修 盧旭

文集の編集という文学上の営為において、中唐が大きな画期である。それ以降、文人たちの間に自ら詩文を整理して集を作る熱意が高まった。しかし残念なことに、中唐の自編集の大半が散佚してしまい、その編集の実態に注目した研究は少ない。例外として、『白氏文集』には中唐の代表的文人である白居易（七七二～八四六）の詩文が多く保存されており、自編集を考察するのに適した資料のはずであるが、従来、宋代以降に流伝した刊本『白氏文集』は白居易手定本とはかなり異なると考えられ、そのテキストとしての質が否定されてきた。しかし、そうした見解は妥当ではなく、実は刊本もかなり『白氏文集』の原形を保っている。本論文は刊本に依拠して、旧鈔本と校本を参照しながら、『白氏文集』の編集に焦点を当てて、その編次を復元したうえで、『白氏文集』に潜む文学観・編集理念を究明したものである。

本論文は序論、本篇六章、結論から構成される。

序論では、『白氏文集』のテキスト、編次復元、分類に関する先行研究を概観したうえで、現行『白氏文集』も実はよく原貌を保つこと、及び編集の視点からさらに検討する余地があることを確認した。次いで本論文全体の構成を説明し、『白氏文集』諸テキストについて、その書誌情報や特徴などを紹介した。

第一章「動態的な『白氏文集』」は、『白氏文集』の編集を解明するために、「動態的な『白氏文集』」という本論文の核心をなす視点を提起した。「動的」とは、すなわち白居易が生涯にわたり随時自分の作品を整理しており、存命中に『白氏文集』の巻次、文字、作品数、作品配列が絶えず変動し続けたことを意味する。

続いて、1465「唐故會王墓誌銘 並序」、及び0596「長恨歌」の「廻頭下視人寰處」という一句の諸本における文字の異同、及び『白氏後集』の形成過程における作品配列の変化によって、この視点の妥当性を検証した。白居易の生前には『白氏文集』唯一の定本と言うべき標準テキストが存在しないため、『白氏文集』における前後の齟齬や諸本の異同を対照する際に、その中の一方は他者による改変だと簡単に判断できず、いずれも白居易本人によるものだという可能性が十分にあり得ることを示した。

さらに、3024「題文集櫃」の「前後七十卷」という一句の理解によるその詩の創作時間に対する議論、3798「醉吟先生墓誌銘 並序」の真偽、白居易が晩年に寺院に奉納した文集の様態、『白氏長慶集』の収録下限などに関する従来の論争を回顧したうえで、「動態的な『白氏文集』」という視点によって旧説に対して修整補充を加えた。上記の論争が生じたのは、まさに白居易が生涯にわたって『白氏文集』を編集し続けていたことが理解されていなかったからである。

第二章から第四章までは一つのまとまりであり、主として『白氏文集』、特に『前集』である『白氏長慶集』の様態から、その背後にある白居易の文学観・編集理念を分析、検証した。

第二章「詩集十五卷から『白氏長慶集』の詩巻へ——白居易と元稹の編集理念の違い」は、『白氏長慶集』、特にその古体詩の分類に関する研究である。

長慶四年（八二四）に成立した『白氏長慶集』、及び『白氏長慶集』の中に保存される元和十年（八一五）成立の「詩集十五卷」の様態を分析し、1486「與元九書」において提起された四分類（諷諭・閑適・感傷・雜律）は、詩集十五卷本のために設けられた基準であり、元和末年（～八二〇）の時点において、四分類はすでに事実上崩壊していたという結論を得た。ただし、『白氏長慶集』では依然として四分類を維持しているが、その原因は『長慶集』の編集者たる元稹（七七九～八三一）にある。

長慶末（～八二四）に至るまで、元稹は詩を分類するという主張を掲げ続けたが、その一方で時間的な制約もあったため、既成の四分類をそのまま維持しようとした。さらに、元稹は非諷諭五言古詩を細分しないため、白居易の江州時代以後の二卷分の五言古詩を、おおよその風格の違いによって「閑適」と「感傷」に分類した。その結果、分類が不自然な詩が存在し、後世の読者に『白氏長慶集』の分類が混乱しているという印象を与えることになった。そのほか、白居易と比べて、元稹は整った数字にこだわりがあったようで、『白氏長慶集』の巻数や収録作品数を調整して、各巻内部の統一よりもむしろ詩文集全体の形式美を追求した。

第三章「『白氏長慶集』雑律詩の編次復元に関する再考」は、『白氏長慶集』雑律詩の巻の配列を復元する試みである。

原本『白氏長慶集』の雑律詩の巻には、それぞれ百首が収録されたはずである。しかし、現存刊本の巻頭内題に「凡一百首」と記されながら、その実際の収録数が百に満たない巻も存在する。これは『白氏文集』の流伝過程に発生した齟齬であると解釈できよう。幸い日本には旧鈔本『白氏文集』に由来する選抄本、及び旧鈔本によって校語を書き入れた校本がいくつか伝存する。近年、陳狷氏は天海校本に基づき、『白氏長慶集』雑律詩の巻の復元を試みる論考を発表したが、しかし陳氏は天海校語を過信し、その不合理な記述を復元作業に取り入れた箇所もあり、その結論に問題がないわけではない。筆者は陳氏の所説を踏まえ、選抄本・校本資料、及び『白氏長慶集』雑律詩の巻の巻頭内題に記された収録数と該当作品の創作時期を参照して、『前集』である『白氏長慶集』の雑律詩の編次を改めて考察した。

考察の結果として、佚詩 3760「歙州山行憶故山」を巻十三、3738「城西別元九」を巻十五、3757「聽琵琶勸殷協律酒」を巻十九、3739「陳家紫藤下贈周判官」を巻二十に復元し、1306「閑坐」1307「不睡」を巻十九から巻二十に移動すると、『白氏長慶集』雑律詩八巻のうち、巻十九が九十九首あるのを除き、他の巻はすべて百首になる。しかも巻十九は百首一巻の巻に挟まれており、もともとは百首あり、『白氏長慶集』律詩八巻は数量上、すべて整った形態であった可能性が高い。以上の結果により、第二章に述べた『白氏長慶集』が形式美を追求したテキストであるという仮説が裏付けられた。しかし、この形式美はやはりいささか機械的なものである。例えば巻十八に白行簡の詩「望郡南山」一首を併録するにもかかわらず、総数を百にしている。

このほか、附論として 3760「歙州山行憶故山」と関連する白居易の貞元十五年末の移動に関する考察を行い、貞元十五年末、白居易が大運河を経由して南方から洛陽に赴いたと推断した。

第四章「唐における唱和集と自編別集の関係——白居易と元稹・劉禹錫を中心に」は、中唐後期における唱和集と自編別集の関係に関する研究である。

白居易、元稹、劉禹錫はいずれも生前に別集と唱和集の両方を編集した。しかし、この三人の別集と唱和集の関係は一致しない。現行の三人の文集を分析して、元稹と劉禹錫は唱和集の詩を別集に収録しなかったのに対し、白居易は唱和集の詩を別集に再録したことが分かった。

唐代において、別集や唱和集を編集する主な目的は作品保存にある。作者が生前に自ら文集を編集すれば、おのずと複数の文集を生み出すことになる。元稹と劉禹錫のように、唱和集の詩を別集に収録しないのは当時の一般的な作法であったようである。

これに対して、白居易の唱和詩は生前から非常に流行したため、別集と唱和集両者の機能分化をもたらした。つまり、白居易は別集を作品保存のために、唱和集を作品伝播のために、それぞれ用いたのである。また、彼は作品保存と偽作防止を目的として、唱和集の

詩を別集に収録した。このほか、内因として詩人意識の覚醒を挙げることもできよう。白居易は別集を己の分身と見なし、自らの文学の営みをすべて『白氏文集』に留めるべく、全集を編集しようと企図したのである。

文人たちが文集を自編した中唐において、白居易の場合、別集と唱和集両方を編集するという時代の共通性を持ちながら、その一方で、全集編集への執着という個性が際立っている。さらに、全作品を『白氏文集』に保存しようとした白居易の編集意識と方法は、まさに宋代以後の読者のニーズに応えるものでもあった。その意味において、『白氏文集』は写本の時代に生まれながら、刊本が主流となる宋代以後の受容においても成功したと言える。

以上の第二章から第四章までは、『白氏文集』のテキストの外側の様態を分析してその編集理念を探究した研究である。以下の第五章と第六章はテキストの内側から、『白氏後集』古体詩の分類様態によって、白居易の詩体観を探究した研究である。

第五章「『白氏後集』における「格詩」」は、『後集』の「格詩」に関する研究である。

『白氏後集』には古体詩四卷半があるが、呼称が異なっても、各巻の区別は必ずしも明確でない。ここでは「格詩」の意味、外延、特徴を詳細に考察した。

「格詩」の「格」の意味については、従来、二種の意見がある。中唐当時の用例、及び白居易自身の記述を分析すれば、陳寅恪を代表とする「格＝風格、格調」の説が勝る。

次に「格詩」の外延については、清代以来、「齊梁体」説、「古体詩」説、「五言古詩」説という三つの説があり、現代になると、「古体詩」説と「五言古詩」説を折衷する陳寅恪による「広狭二義」説も現れた。陳氏の説に対しては刊本の巻頭内題と一致しないという指摘もあるが、筆者は刊本『白氏文集』の目録を精査したうえで、やはり陳氏の「広狭二義」説を支持する。

「半格詩」に関しては、筆者も現在の学界の主流である「半分が格詩」という説に賛同したい。ただし、巻六十九に七言古詩二首があるのはいささか理解に苦しむが、おそらく東林寺に送る直前、白居易は急いでこの二首を補充したため、巻頭内題を修正するのが忘れられた可能性があるだろう。

「格詩」の特徴について、まず声律の面では、詩集十五巻の「古調詩」と比較すると、「古調詩」よりも律詩化の程度が高い。ただし、仄韻詩の比率が高く、なお律詩との隔たりがある。また、「古調詩」内部にも差異がある。「諷諭古調詩」と「閑適古調詩」の声律の特徴が一致し、「感傷古調詩」とは違いがある。「感傷古調詩」は、むしろ「格詩」の声律の特徴と近い。「諷諭古調詩」と「閑適古調詩」を作る時に、詩道の回復を意識する白居易は、より伝統的なスタイルの五言古詩を作ろうとした。これに対し、「感傷古調詩」と「格詩」を作る時は、心理的にリラックスした状態であり、近体詩の声律規則の影響が現れやすかったと考えられる。

内容の面では、「格詩」の具体的な作例を『前集』の「閑適詩」、「感傷詩」、及び『後集』の律詩と比較して、「格詩」には五言古詩に共通する説理性、士大夫としての矜持、古典的な語彙の多用などの特徴とともに、晩年の生活を楽しもうとする姿勢が確認できる。

第五章で明らかにしたのは、「格詩」が古体詩を指すという当時の一般的用法に対して、白居易は「格詩」を五言古詩に限定した。これは彼自身の創作実践によって詩体を定義したものにほかならない。また、「格詩」とは『前集』に見えない呼称であるが、『前集』の「閑適古調詩」と「感傷古調詩」から風格上の特徴の一部を継承して融合したものである。そこから前・後集の繋がりを窺うことができる。

第六章「『白氏後集』における「歌行」「雑体」」は、『後集』の「歌行」と「雑体」に関する研究である。

『白氏文集』の用例を見れば、白居易にとっての「歌行」は七言古詩である。しかし、逆に七言古詩＝「歌行」という認識は白居易にあてはまらない。七言古詩にはまた「雑体」があり、すなわちまとまりのない、「歌行」以外の雑多な七言古詩を指す。

「歌行」と「雑体」との違いはまず詩題にある。先行研究では、歌行の多くに「歌詞的詩題」があると指摘されるが、筆者は新樂府をはじめとする詩作を検討した結果、詩の第一句或いは第一句（場合によって第二句や後ろの句）の一部を詩題に取り入れることも「歌行」の特徴の一部であることを明らかにした。

このほか、内容の違いも重要な判断基準である。白居易の「歌行」は伝統的な主題に沿い、詠物・叙事、抒情、及び両者融合の三類に分けられる。詠物・叙事歌行の作例は少ないが、「歌」や「行」と詩題が命名され、最も伝統的と言える。抒情歌行においては、老衰の感慨が最も重要な主題であり、老衰に対する態度によって、「歌行」はほかの詩体と区別できる。

具体的に比較すると、「格詩」は説理的で、老衰を悲しまない。それに対し、「歌行」は「格詩」よりも直情的で、老衰の悲しみを率直に表現する。また、「格詩」はいつも官僚の立場、「歌行」は個人の立場に立ち、それぞれ発想が違う。

「歌行」と律詩を比較すると、「歌行」は老衰を悲しむが、老態に対する描写は少ない。白居易は律詩で老態を描写し、老衰した自分ときちんと向き合おうとする。また、律詩は短小の詩型であるため、「格詩」や「歌行」のように説理や事物の比較に適さない。

「雑体」については、唱和詩が多いことを指摘することができる。ここから白居易とほかの詩人との詩体に対する認識の違いが見える。つまり、当時一般の詩人と比べて、白居易はより明確な詩体観を持ち、七言古詩の中の「歌行」と非「歌行」を区別している。

詩題以外に、「雑体」の雑たるゆえんのもう一つの特徴は、ほかの詩体に見まがうような詩が存在する点である。「歌行」に似る「雑体」と「歌行」を比較すれば、「歌行」に似る「雑体」の風格は「格詩」に偏り、「歌行」から離れて説理的である。八句の律詩に似る「雑体」と八句の律詩を比較すれば、両者の内容は近いが、律詩では各聯がそれぞれ違う役割を担い、相互作用的に詩境を構築するのに対し、「雑体」はしばしば単一方向で展開する。

第六章で明らかにしたのは、七言古詩を「歌行」と「雑体」に区分した理由は、編集分類を通して、当時の曖昧な詩体を定義づけようとしたという点である。また、後人は白居易の歌行観を完全に継承したわけではないが、『白氏文集』の「歌行」の様式は新樂府と歌行の定義確立に大きな影響を与えた。